〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第56号 2006年3月31日

資料見聞

ツグロ様の写真

田辺寿男の民俗写真より

泥で不思議な顔が描かれています。一体誰の顔なのでしょうか？

写真を撮影した田辺寿男さんは、次のように記しています。

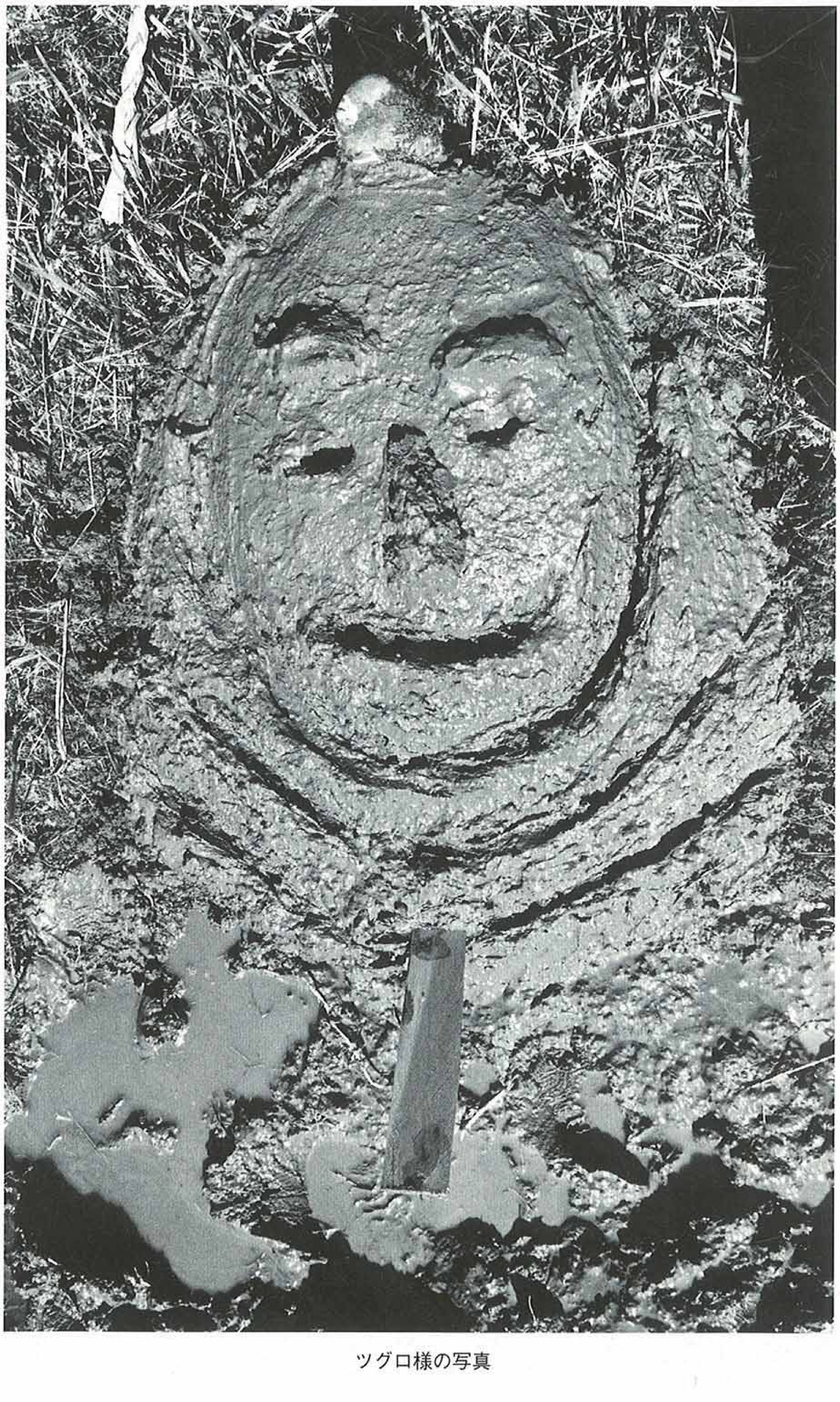
「ツグロ様。神田のサバイ神（田の神）を指していう。ツグロ様は三角田である。泥で顔を作り、幣を持たせる。」

泥の顔は、ツグロ様という田の神でした。三角田は三角形に近い形をした田のことで、サバイ神を迎える田として利用されるものがありました。

撮影されたのは平成七年、四万十市（旧西土佐村）半家です。先日、半家を訪ね、ツグロ様の田を引き継いだ方から、今も田植えのときにツグロ様を祀っていると聞きました。

しかしその一方で、人知れず失われてきたものが、各地にどれ程あることでしょう。

田辺さんは長年に亘り高知の民俗を撮影してきました。田辺さんが丹念な民俗採集とともに撮影した写真には、失われた高知県の暮らしの一コマ一コマが焼付いています。それらは県民の皆さんに田辺さんから贈られた「心の財産」と言えるでしょう。（中村淳子）



ツグロ様の写真

開館一五周年関連企画展

『いのちの河・くらしの川　田辺寿男の民俗写真2』

平成一八年四月二九日(土)～六月一一日(日)

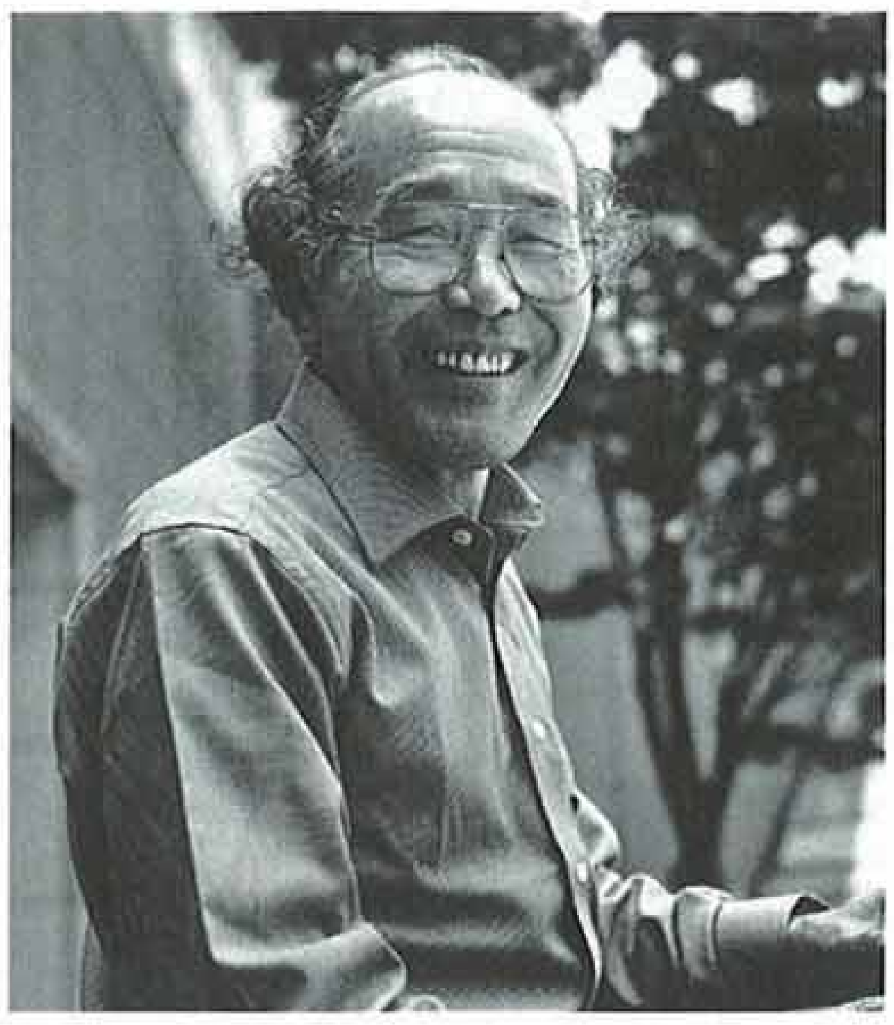
中村　淳子

それは『ぼく村』からはじまった

民俗写真家、田辺寿男さんの仕事をまとまった形で当館が紹介したのは平成十一年の『ぼくの村は山をおりた』(以下『ぼく村』)が最初でした。

同展は「集落移転」を取り上げた写真展で、田辺さんの現代社会に対する鋭い視点や人々への温かい眼差し(まなざし)が、大きな話題と共感を呼びました。

調査研究の成果を社会に還元することは博物館の大切な仕事です。県民による県民のための調査研究の成果をいかに公開していくか…、そんなコーディネイターとしての役割も、ますます学芸員に求められてくると思います。



田辺寿男氏　1999年　武吉孝夫氏撮影

そこで、県民のみなさんとのさまざまな共同企画を当館の学芸員は行なってきました。私の場合は『ぼく村』が、その第一歩でした。開催にあたっては、田辺さんと打ち合わせを重ね、写真展のテーマや展示構成から練っていきました。こうした共同企画は大変ですが、館外の方と一緒にソフトを作り上げるのは楽しく実り多い仕事です。

『ぼく村』から五年後の平成十六年、「田辺寿男の写真を見る会」による『ぼく村』のアゲイン展が開かれました。その折、「別のテーマでの田辺さんの写真展がみたい」といったご意見をいただきました。

田辺写真展第二弾は、こうした県民のみなさんの声から生まれたのです。

田辺寿男さんからの贈り物

今回の写真展は、お披露目展の意味もあります。『ぼく村』の頃から「いずれは…」と、お話が出ていましたが、田辺さんが撮影した貴重な写真の大部分を、当館にご寄贈いただくことになりました。その記念の展示です。

現在、目録化の作業を進めていますが、総点数は数万点になりそうです。田辺さん、撮りに撮ったり、です。

準備期間が約三ヶ月しかとれないのに、あえて開催に踏み切ったのは寄贈写真の中に写真集用として焼き付けたものが百枚程あったからです。写真は項目別にまとめられていたため、田辺さんの民俗写真の世界を、ご自身の構成によって伝えられると考えました。

そして、『河川』へ

写真集のタイトルは『河川(かせん)』でした。高知市民図書館から刊行された『海辺(かいへん)』、『山間(さんかん)』に続く三冊目として構想されましたが、諸般の事情で刊行が出来なくなっていました。この『河川』をベースに展示構成を考え、あわせて写真集を刊行することにしました。

『河川』は、『山間』、『海辺』と同様に、高知に暮らす人々の日常生活をうつしとりながら、信仰を前面に出していくという構成をとっています。橋や漁、炊事場など日常の写真、神聖視される中洲や滝、えんこうや見渡し地蔵、七夕や盆など川の信仰の写真が、田辺さんによって選ばれていました。

いのちを育み、暮らしの中を流れ、やがて、いのちが還る川――田辺さんの写真が抱かせる川のイメージから、写真展のタイトルは『いのちの河・くらしの川』としました。

腹でシャッターを切る

田辺さんの写真が人々を惹き付けるのは、何故なのでしょうか。

田辺さんは、本誌のインタビューで、「写真は、そこに感情をゆさぶるものがあれば、それで充分」(『岡豊風日』第24号)と語っています。しかし、感情をゆさぶる写真を撮るのは、「それで充分」どころか、難しいことです。田辺さんに「写真のテクニックを教えてください」とお願いしたところ、田辺さんは、「技術が先じゃいかんよ。写真は気持が入ってないと」と笑うのです。被写界深度やシャッターチャンス等技術の話は、結局聞けませんでした。

しかし、後に『ぼく村』、『河川』を編集して、田辺さんが写真を撮るときの、それこそが核心部分だと改めて知るのです。それは、構図の決まったきれいな作品とは正反対の田辺流の極意であり、「腹でシャッターを切る」境地です。田辺さんが「見たままの感動を写真で切り取っている」からこそ、写真を見る人の心に感動がストレートに伝わるのでしょう。

情感のある映体

展示写真の焼付は、四万十町(旧窪川町)にお住まいの武吉孝夫さんにお願いしました。武吉さんは、田辺さんが会長をしていた写真クラブ『建依別(たけよりわけ)』

写壇』の元メンバーです。ご自身が写真家ですから、ご自分の作品の焼き付けを優先して然るべきところを、「世話になった田辺さんの写真展だから」、「田辺さんの写真を焼き付けることも、ぼくにとっては写真という表現行為のひとつだから」と、快く引き受けてくださいました。

　写真を焼き付けることで武吉さんは、「田辺さんは映体を持っている。ちょっと土くさいような、それでいて、しっとりとした情感がある写真が多い」と感じたといいます。「映体」とは建依別写壇でよく言われていたことで、曰く、「小説の文体のように、写真には映体がなければならない。」

　武吉さんは、行間を読むようにフィルムから次のように感じ、焼き方も情感を表現するよう努めたそうです。

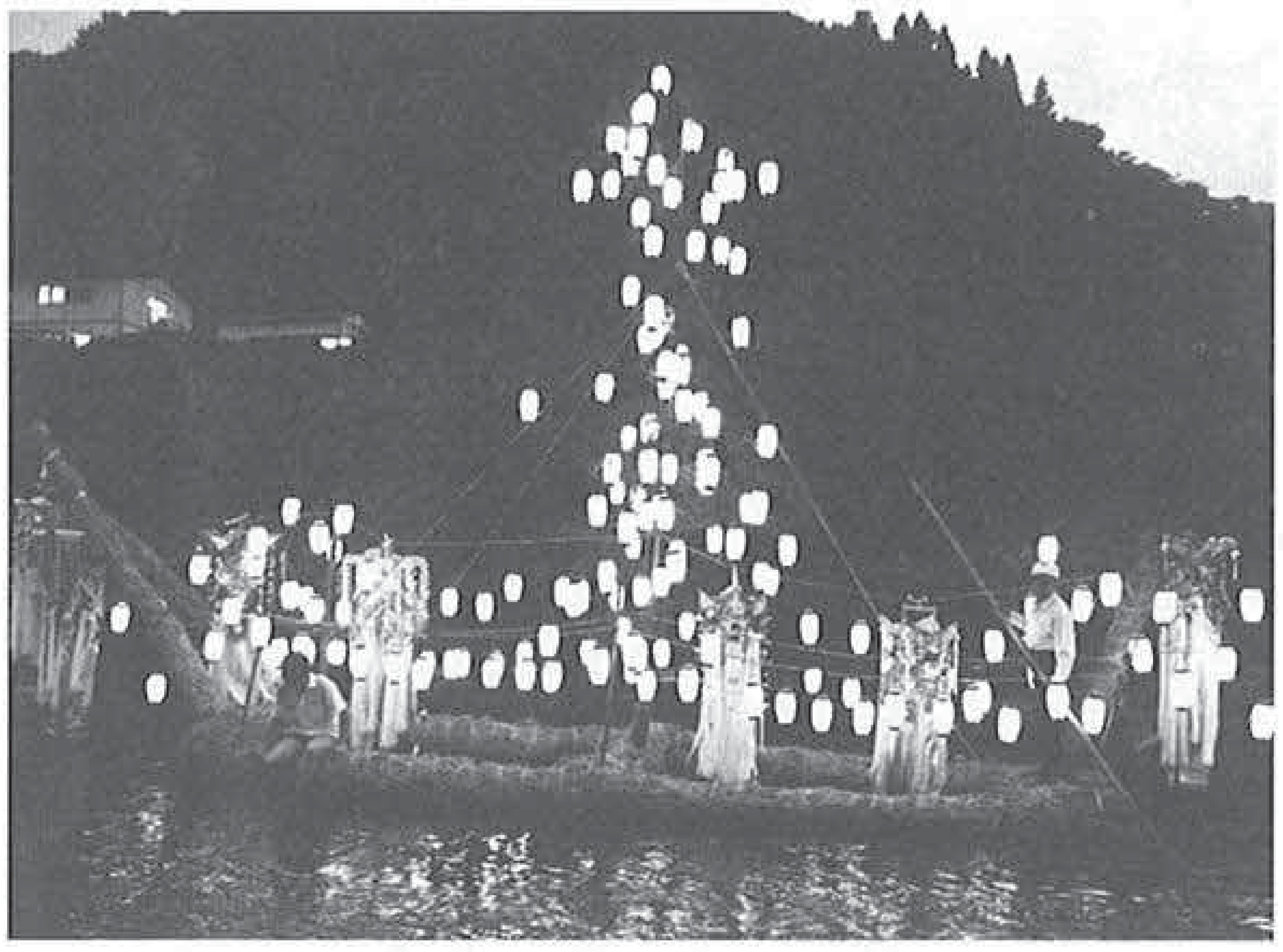
　即ち、「田辺さんの写真にあるのは、土佐人のある種の気質ではないか。土佐人は荒っぽいと言われるが、意外に感傷的に物事を考える。田辺さん自身、そういうセンチメンタルな要素を充分持っている。特にそれは田辺さんが焼付に選んだコマではなく、選ばれなかったコマにある」とのことでした。

　焼き付けの打ち合わせで訪ねる度に武吉さんからうかがった話は、田辺さんの写真を考えるために、実に有意義なものでした。

学童の渡し　四万十市（旧中村市）勝間　四万十川

えんこうを祀る　高知市吹井　下田川

石グロ漁　須崎市　新荘川河口



精霊舟　大豊町大杉　吉野川

民俗写真家の眼差し

　建依別写壇のメンバーは、社会に対しての確たる視点のある写真表現を目指していたといいます。田辺さんは、そうした視点を民俗学の中に見出したのだと思います。

　田辺さんを民俗写真家と名付けた当館の吉村淑甫前館長は、在任中の思出の稿を次のように締め括っています。

　「最後に一つ忘れてはならないのは、民俗写真家田辺寿男の仕事である。膨大な資料写真の中からの提供はまざまざと過去を現在に甦らせているのである。彼は今、病床に呻吟しているが、やがて起き上がって仕事に戻るのを今から楽しみにしている。彼にとっても歴民館の十年は大きかった筈だ」（『岡豊風日』第40号）

　写真家として出発した田辺さんは、民俗写真家となり、写真表現を深化させたのでしょう。

　田辺さんは『河川』のラストに離村を持ってきています。早明浦ダムに沈む村の写真です。そこには『ぼく村』と同じ視点が貫かれています。「内容さえあれば写真はぶれたっていい」と言う田辺さん。しかし、その眼差しは、ぶれることがないのです。

　その眼差しを、写真展会場で確かめていただきたいと思います。

田辺寿男写真展『ぼくの村は山をおりた』

高知女子大学・大学院　助教授　青木　淳

　田辺寿男さんは今年八十五歳。私の知人の中でも、特に穏やかでつましい土佐人だと思う。お目にかかるたびに、「お世話になるばかりですみません」と申し上げると、「滅相も無い。私が教えていただいているんです」といつもおっしゃられて困ってしまう。しかし、本当にお世話になっているのは私なのだ。東京生まれの私を、梼原町や大正町、そして馬路村や東洋町に導いてくださったのも、田辺さんだった。

白髪分校卒業の日

　申し訳ないが田辺さんの写真を撮るすがたは、あまりに不器用にみえる。格好だけなら私の方がいいかもしれない。しかし、対象となる人や動物、時に仏像などと向き合うときのあの距離感覚は見事だと思った。小さな声で何かを言うのだが、なんだか分からない。しかしその瞬間、被写体は田辺さんに吸い込まれている。

　写真家としての田辺さんは早くからその世界では知られていたが、民俗学の世界でも高知を代表する研究者の一人だ。私が民俗学者としての田辺さんを知ったのは、京都の国際日本文化研究センターにいたときだった。今の職場に赴任するにあたって高知のことを少しずつ勉強していた頃、今の歴史民俗資料館の坂本正夫館長との共著『図説日本民俗誌　高知』（岩崎美術社）の写真を担当されたのが田辺さんで、そのフレームはまさしく民俗学者のそれだと直感的に思った。

　この本はシリーズものであったが、高知県の分だけはどこか雰囲気が違っていた。その理由は、田辺さんの写真だった。田辺さんのモノクロ写真は、何故だかどの写真にも、その場所やそこにいる人たちの生活した時間が込められているような、そんな気がしたからだ。それは一瞬の時と、人と、場所を記録するための写真ではなく、過去を未来につなぎとめておくために必要な手段だったようにも思う。

　一昨年、田辺さんの展覧会を土佐病院に見に行った。一九九九年に歴史民俗資料館で開催された特別展『ぼくの村は山をおりた』のリバイバルだ。田辺さんの写真を愛する有志による「田辺寿男の写真を見る会」が企画した。

　私は久しぶりに、大伸ばしの田辺さんの写真を見せてもらった。会場である病院のホールに一時間ほどいたが、誰も来る人はない。そのおかげか、だんだん田辺さんの写真の中から、静かに村をおりる日を待つばかりの人たちの足音や、木に登る子供の呼吸、急にカメラを向けられて犬も一緒に緊張したこの瞬間の空気の音が聞こえてくるような気がしてきた。

　この写真は、昭和四十三年から約四年間にわたって田辺さんが撮ったものの一コマだ。田辺さんはこの作品について、かつて本誌で語っている。

　「昭和四六年春、芸西小学校白髪（しれげ）分校最後の卒業生二人が送られる日がきた。写真の小さい子はまだ小学生になっておらず、兄に付いて通学するうち、岡島先生の好意で、読み書きを教わっていた子である。この春一年生になる。隣に並んだ犬君は、この写真の一枚先のネガによると、誇らしげに三人の先頭を歩いていたものである。私の『そこで記念写真を撮らせて』と頼んだ言葉にすばやく反応して整列したのである。ここでは猫も同じで、むしろ猫の方から人に遊びを求めてくる。若しかすると鳥も同じではなかろうかと錯覚する」（『岡豊風日』第31号）

　芸西村の白髪・板渕（いたぶち）・宇留志（うるし）の集落は、行政指導の一環として実施された「過疎地域集落移転事業」により、その住民は村をおりることになった。人の意に反して、生まれ育った場所を去ることは、切ないことだ。無邪気な子供や猫の表情は、それに追い打ちをかけてくる。しかし田辺さんのモノクロの世界は、そのことをけして強制しない。それゆえに、心にしみる。優しい、そしてこの村を見続けてきた民俗学者としての眼差しが、この作品にはこめられている。

　今回、田辺さんの写真展の第二弾が歴史民俗資料館で開催されることになり、その関連企画として『ぼくの村は山をおりた』が再び展示される。

　ぜひ一度、みなさんにも見てほしいと思う。田辺寿男の見た風景を。

民俗展示室

ミニ企画コーナー

おひなさま

香泉人形の立雛

「郷土玩具のおひなさまがカワイイッ！」をキャッチコピーに毎年開催している雛展。今年初登場の香泉人形は土佐の郷土玩具作家、山本香泉さんの土人形です。オリジナルは女雛の赤、男雛の青い衣装が印象的ですが、展示ではその復元に取り組む田村雅昭さんの別の彩色の立雛を紹介しました。

田村さんが古くから土佐に伝わる十市土人形を参考にした、白い衣装が何とも可憐な立雛です。（中村）

体験学習

できるかな 古代人に挑戦 勾玉作り

一〇月一九日。野市小学校PTA行事で児童、父兄合わせて一八〇名が勾玉づくりに来館しました。当日は、お天気にも恵まれ、「わいわい・ガヤガヤ」と親子の会話が歴史民俗資料館に響き渡りました。ろう石をペーパーで削り形を整え、気持ちを勾玉に込めます。出来上がりと同時に沸き上がる歓喜の渦。世の中で唯一自分だけの宝物となりました。（大森）

土佐の民具19

墓掘順番帳

坂本 正夫

写真の墓掘順番帳（縦一二・五センチ・横三二・五センチ）は一九七四（昭和四九）年に吾川郡春野町の弘岡で見かけました。

半紙を二つ折りにし約五〇枚を紙紐で綴じ、横長にして使っていますが表紙には丈夫な渋紙を使用し、記事は毛筆で記されています。

葬儀に関する規約や明治末期以降に亡くなった人の俗名、死亡年月日、行年、葬儀年月日、墓掘人夫をはじめ各担当役の氏名、必要経費などが記されています。

高度成長期以前の土佐の農山漁村は土葬が普通で、葬儀の執行はトウマグミ、シルグミ、コウグミ、アナグミ、アナホリグミ、ハカグミ、フコウグミなどと呼ばれる近隣の葬式組によって行われていました。

葬式組の主な仕事は幟、灯籠、花かご、草履、担い棒その他の葬具作り、死亡通知、墓穴掘り、棺担ぎ、炊事の手伝い、埋葬などです。

これらの仕事は葬式組の内部を区分して担当したり、家順に担当したりすることもありましたが、このような葬儀に関する事項を記録したのが墓掘順番帳でした。

今日では火葬が一般的になり、葬儀は葬儀屋、死亡通知は新聞社に依頼するのが普通になりましたので葬式組の役割が少なくなりました。

吾川郡春野町で見た墓掘順番帳（一九七四年）

学芸員の机から

考古

仏跡巡礼
―釈尊生誕の地ルンビニー②―

釈尊が生まれたのは、インドではなく現在のネパールの西南部タライ地方のルンビニーです。

一八九六年一二月のことA・A・フューラーは、ルンビニー村の調査を行ったところ、一本の石柱の下半部を発見しました。この石柱には、アショカ文字で銘文が刻されていました。それには「天愛喜王（アショカ王）は、灌頂（即位）二十年に、自ら「ここに」来て崇敬した。ここで仏陀・釈迦牟尼が生誕された。と「伝えられる」自然石を「保護する」柵「または壁」を伴った「建造物を」設営せしめ、また石柱を建立せしめた。ここで釈尊が生誕された故に、ルンビニー村は租税を免ぜられ、また「生産の」八分の一を支払う（六分税から八部税に減税）ものとせられる」（塚本啓祥博士訳）と刻されています。

アショカ王は、古代インドマウリヤ王朝第三代の王として（在位紀元前二六七～二三二頃）インドを統一しました。アショカ王の名前は、現在でもホテル名やインド航空などインドを代表するものに用いられています。かの有名な玄奘三蔵も西暦六三〇年ころこの地を訪れています。玄奘の『大唐西域記』には、悪龍の雷鳴で折れていることが記されています。その上に馬の像があったと記されています。（岡本）

アショカ王石柱　ルンビニー

歴史

「沖之島図」から見えたもの

企画展「描かれた土佐の浦々」が閉幕しました。期間中、来館されたお客様からは様々な声が寄せられましたが、「郷里の原風景を想い出しました」という心温まるものもあれば、間違いをご指摘いただいたものもありました。なかでも一番驚かされたのが、「沖之島図」に関する新情報でした。

江戸時代、土佐藩と伊予宇和島藩との間で「沖之島」の国境線をめぐる対立があった関係で、境界を明確にした「絵図」は他にも数点現存しています。

しかし、本図のように土佐側が一色に塗りつぶされたものは異色でした。決め手のないまま展示していたら、宇和島から来た方が、「これは愛媛側で作られたものでしょう」と丁寧に教えてくれました。

事実、愛媛県立図書館には、「沖之島鵜来島姫島請取目録」「同書類受取證」という資料が現存していて、いずれも、明治七年八月十四日付けで、高知県権令岩崎長武が愛媛県権参事大久保親彦に宛てた受取書でした。

この絵図は、沖の島全島が高知県に編入された時、愛媛側から送られた関係資料の一つだったのです。

地元の方からのご指摘は本当に鋭く貴重なものです。（野本）

「沖之島図」（現宿毛市）

民俗

フィルムが消える日

時の流れは速いもの。企画展の準備をしていると余計にそう感じます。「ミラボー橋の下をセーヌは流れる　月日は流れ私は残る」と、恩師に教わったアポリネールの詩をそっと口ずさんでみるのです。

今回の企画展では、写真を取り巻く状況の変化を実感しています。田辺寿男さんが『ぼくの村は山をおりた』で使い、館員総出で写真パネルにした水貼りの出来る印画紙は、今や生産中止です。印象深かった全倍サイズの大きな印画紙も同様です。

武吉孝夫さんの写真店で打ち合わせ中、展示に使う予定だったあるメーカーの、全紙の印画紙硬調四号（強いコントラストが持ち味）が生産中止との情報も飛び込んできました。デジタルに押され、フィルムカメラ市場は撤退モードです。写真表現の現場は急速な変化に見舞われているのです。

そんな時流と対局にある田辺さんの写真を展示することは、瀬に棹さす行為のように思えます。しかし、だからこそこうした企画展の意義は大きいとも思うのです。田辺さんが撮ったミラボー橋ならぬ沈下橋の下の四万十川は、光を湛えて流れています。（中村）

田辺寿男さんが撮った四万十川の写真

伊能大図がやってきた

平成18年1月7日(土)～22日(日)まで県内初となる伊能大図(四国部分)のフロア展示を2階ホールにて行いました。来館した小学生も、自分の住んでいる地名を探すため身をかがめながら興味深そうに地図の上を歩いていました。

7日に行われたワクワクワーク「測ってみよう！」では参加者は普段聴くことの出来ない測量についての話や、実際に測量機器を使用して貴重な体験をすることが出来ました。

そして、18年度の行事として平成19年3月には、伊能大図「日本全国地図」の展示を予定しています。

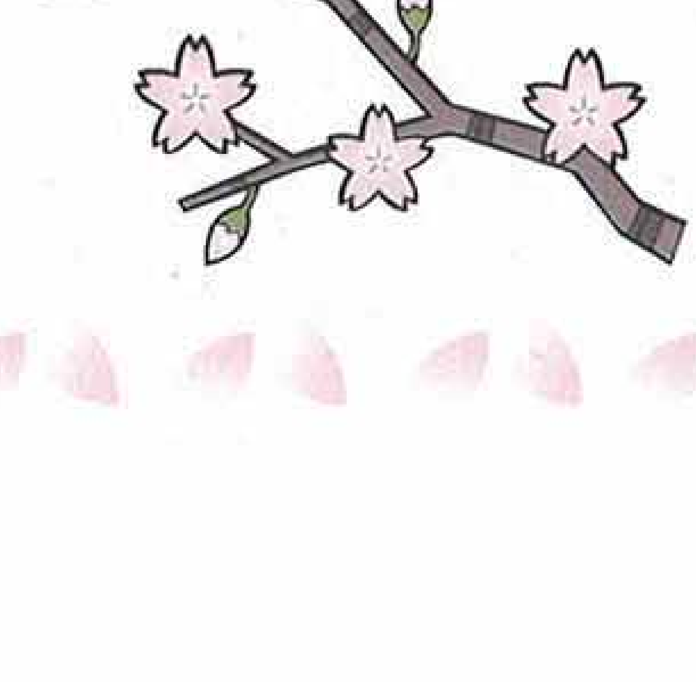
(猪野)

岡豊山の桜展 4月25日(火)～5月31日(水)

開館15周年記念企画の一環として岡豊山の桜・写真展を行います。

県内外のアマチュア写真家の撮影した写真を募集し館内フリースペース及びギャラリーコーナー(観覧無料)にて展示いたします。また入賞作品は館内ロビーに年間掲示し、当館の広報等に使用させていただきます。

岡豊山の桜の魅力、そして写真家の想いを是非この機会にご覧下さい。 (猪野)



岡豊山のさんぽ道

伝廐跡曲輪（くるわ）は遠くに太平洋が見えるすばらしい眺望です。

18年度れきみんサークル入会受付中!!

おもな特典

・常設展・企画展へご優待
・館発行書籍を割引価格でご購入。
・年報・岡豊風日などの送付
・史跡巡りや企画展の案内の送付
などなど

【年会費 1,200 円】

申し込み方法

①資料館受付にて申込み
②郵便局口座に振り込み
振込用紙に住所・氏名・年齢・生年月日をご記入下さい

郵便局振込口座番号	01690−8−58321
加入者名	高知県立歴史民俗資料館 れきみんサークル

手続き終了後、会員証を発行いたします。
会員期間は平成18年4月1日〜19年3月31日
毎年更新手続きが必要です。

お知らせ

平成18年４月１日より月曜も開館致します。
（但し臨時休館・年末年始の休館あり。）

岡豊風日（おこうふうじつ）第56号
平成一八年三月三一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783−0044　南国市岡豊町八幡1099−1
TEL　088−862−2211
FAX　088−862−2110
開館時間　午前9時〜午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　平成18年4月1日から毎日開館
年末年始の休館日（12月27日〜1月1日）臨時休館はあります。
入館料　通常期［常設展］大人（18歳以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・㈱飛鳥

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/˜rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成18年３月〜平成18年６月の催し物

企画展

開館15周年関連企画展
『いのちの河・くらしの川』
田辺寿男の民俗写真２
4月29日（祝・土）〜6月11日（日）

いのちを育み、暮らしの中を流れ、やがて、いのちが還る川――田辺寿男の民俗写真展の第２弾。テーマは「河川」です。

企画展講演会　5月6日（土）　14:00〜16:00

講師　坂本 正夫 氏（高知県文化財保護審議会委員）
「田辺寿男が写した土佐の民俗」
<要予約、はがきかeメールで。>

座談会　5月20日（土）　14:00〜16:00

「田辺寿男の写真の魅力」
<要予約、はがきかeメールで。>

武吉 孝夫 氏（元建依別写壇）
片岡 千歳 氏（田辺寿男の写真を見る会代表）
青木　淳 氏（高知女子大学・大学院助教授）
坂本 正夫 氏（高知県文化財保護審議会委員）

講座 ―― 当館学芸員

5月21日（日）	14:00〜15:30	「河川の民俗①」
5月28日（日）	14:00〜15:30	「田辺寿男の眼差しと表現」
6月４日（日）	14:00〜15:30	「河川の民俗②」

展示室トーク　5月3日（祝・水）　14:00〜15:00

担当学芸員による展示解説です。

ワクワクワーク　<電話申込・「白黒写真…」は小学高学年以上、大人可。>

5月５日（祝・金）	10:00〜12:00	「白黒写真を撮ろう」
5月14日（日）	10:00〜12:00	「白黒写真を焼き付けよう」
5月27日（土）	14:00〜15:00	土佐民話の家⑯「川の話」

民俗展示室企画コーナー

4月29日（祝・土）〜6月11日（日）
田辺寿男の民俗写真　「ぼくの村は山をおりたAGAIN」

岡豊山の桜写真展　4月25日（火）〜5月31日（水）

史跡めぐり

愛媛県歴史文化博物館と四国霊場　6月３日（土）
<専用申込書をご請求ください>

歴民の日

5月3日（祝・水）

5月3日は開館記念日。入館料無料です。
楽しいイベントをご用意してお待ちしております。